

佛敎實在觀の現代的意義

長 谷 川 正 徳

仏敎が例えば基督教に比較して勝れて理智的合理的な哲學的印象を強く抱かせるのは、仏陀の悟道なるものがあるのまゝの現実の真相觀照を離れては成立しないものであるという仏敎成立の源初にその理由が存しよう。仏陀はこの現実の真相觀照を如実知見といつた。如実知見とは何であつたか。古來三つの命題に整理されて敎説されているところの諸行無常、諸法無我一切皆苦がそれである。

尼連禪河畔の禪觀において仏陀はまづ独断的な神や絶対者の設定を打棄てた。一切の先入的偏見を捨棄してかかつた。かくして得られた真相認識はアトマンの實有を根底的に否定した前記の命題であつた。この仏陀の敎説の出発点にみられる方法論的意義は極めて重要である。我々は仏陀のこの方法が現代の嚴密なる學的認識の實証的方法是態度と相通するところのものである事を知り得よう。

仏陀によつて觀照認識された事象の世界は生滅常なく変移して止まぬ無常のそれであり、従つて又あらゆる事物は固定的の主体や実有性など持たぬ無我のそれであつた。實在の世界は關係

に、おいて、おかれた世界である。それ自身不変の有などありはしない。すべて相互縁成であり、相依相関である。しかも關係の変移につれて常にやりゆく世界である。かくして實在の世界はまた流動において、おかれた世界でもある。かく無常と無我とは相補的に關係的且流動的實在觀を成立せしめているといえようか、る實在觀は現代の科學的實在觀に相通するものとして先に指摘した仏陀の如実知見という方法とともに誠に注目すべき現代的意味を持つていといえよう。

實在を以て不変不動の本体とみなす本體論的固定的實在觀（宗教においては有神論思想）は古代から近世まで説いたのであつたが近代科學の解明は明らかに本體論的實在觀を否定してきている。今試みに自然科學による實在觀をとつて究明してみらるに、最近の物理學的世界像は明かに關係的流動的實在觀の眞理なるを証明している。實在一般が電氣的性能を帯びる素粒子の結びつきによつて成立するものであり、この結びつきの關係の変移によつて又容易に変移する存在であることは量子論の實証するところである。更に又中間子の理論において、素粒子なるものも素粒子間の關係に於て成立し、この關係の変移によつて不斷に変移するところのものである事が証明されている。更に我々は社會科學の解明がもたらした實在世界の眞理が關係的流動的なものであることを知る時、この實在觀の意義の極めて深刻であることを知り得よう。社會科學は近世初頭の自我意

識に目覚めた市民階級が中世紀の非合理的な社会に對して自己矛盾を感じこの矛盾に抵抗して生み出したところのものであった。そしてそれは、歴史や社会の秩序が固定的自然的不變的なものでなく、常に相對的關係的變移的なものであり、階級社会の發展につれて生滅變化してゆくものであることを解明した。一切の社会的存在は、社会生活を或は制度的に或は観念的に形成する一切のものを含めてすべてその時々々の社会の物質的諸條件との相依關係によつて生み出されてゆくものであるとの近代認識は今日において最も重要なものでなければならぬ。この一つの社会が決して自然秩序でないこと、常に歴史の相對的であるということ、この認識は根本的の關係の且流動的實在觀に支えられたものであるということが出來よう。

かくして仏教の源初における方法態度、そしてその生み出した實在觀は現代の社会科学を真に理解する上にも大きな示唆と役割を持つて我々に迫るものがあるといえよう。

最後に仏教の實在觀は煩雜な形而上学的思辨を否定しているという点に現代的意義の重要さを認め得よう。婆羅門教の絶對

者アトマンが否定されたとき、仏陀の教説は形而上学のそれではなかつた。佛教はこのとき当然に実践哲学の立場に転廻したものであつた。理論の爲に理論を思辨するが如きは佛陀によつて徹底的に否定されたのであつた。佛陀は六師外道の思辨主義を戲論と破析し去つたのである。

かくして佛教は宇宙の根柢としての絶對者など思弁せず、かえつて絶對を實踐の目標におへというあくまで実践主義の立場に成立するものとなつた。個我も普遍も要するに恒常的な我的實在をば否定して、あるものは縁起の世界のみであり、万物を縁成ならしめてゆく実践的仿らきの立場のみである。實踐主義こそ現代人のモットーである。何故なら、實踐こそが認識の眞実性の最も深刻にして決定的な基準であるからである。實踐において否定されるような認識はいかに巧みな論理的装飾といふも眞理ではないといわなければならぬ。これが現代人の眞理に對する態度である。我々は縁起的實在觀のもつ勝れた實踐性をもつとよく解明理解せねばなるまい。

給仕第一の精神

室 住 一 妙

凡そ教学の本質が、聖人被下の教を奉じ、正信に受け、正念

に持ち、如説修行すべき條理たる限り、教権自体の批判、取捨離反、超越は許されぬ。教権へのこの嚴たる認識こそ、すでに三歸戒に前提され、三歸は当然に教、行、証の一貫せる生命として純粹教権に循環する。